大塚 敬節
矢数 道明 責任編集

近世漢方医学書集成

1 田代三喜

名著出版 刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成　第Ⅰ期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 1　田代三喜　第Ⅰ期 全30巻

昭和五十四年四月二十三日　第一刷発行
昭和六十年七月二十五日　第三刷発行

編者　大塚敬節　矢数道明
発行者　中村安孝
発行所　株式会社　名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二一七〇番(代)
振替口座　東京七一一〇七四九番

予約限定版

製版所　株式会社　日本写真製版所
印刷所　有限会社　伊藤印刷
製本所　株式会社　辻本製本

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01194-2 C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

田代三喜座像（古河市・一向寺蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本書第一巻「田代三喜」には、『三帰廻翁医書』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

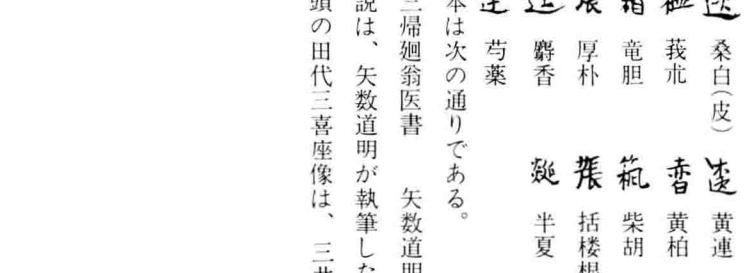
ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、本文中の鉛筆・青インクによる書き込みは、全て省略した。

底本では通常使われない略記号が記されている。ここにその主なものを掲げた。

佩	秦艽	定	遠志	侯	杏仁	例	人参	倹	乾姜	因	猪苓
倜	五味(子)	剛	陳皮	衍	黄耆	俻	地骨皮	因	猪苓	凡	升麻
回	知母	周	茯苓	凡	香附(子)	凡	葛根	凰	紫蘇	凰	前胡
凡	防風	凡	防已	凡	細辛	凰	紫蘇	国	甘草	苟	木通
木	丁香	小	阿膠	恢	白朮	庄	独活				
細	桔梗	行	地黄	汗	麻黄	苹	天南				



一、底本は次の通りである。

三帰廻翁医書　矢数道明所蔵写本　八巻九冊

一、解説は、矢数道明が執筆した。

一、巻頭の田代三喜座像は、三共株式会社提供。

本邦後世派医学の開祖 田代三喜

矢数道明

一 田代三喜の出生地について

田代三喜は、寛正六年(一四六五)四月八日、田代冠者兼綱の子として、武州(今の埼玉県)川越に生まれたとされている。しかし一説に川越ではなく、越生であるともいわれている。越生は川越を距る約二〇キロ、秩父に入る順路の宿場町である。また越生近辺は古蹟が多く、越生駅近くには、太田道灌の故事で有名な「山吹の里」の水車小屋がそのまま保存されている。

現在の埼玉県入間郡越生町大字古池四六四番地・吉沢幸一氏の屋敷の中ほどに「史蹟田代三喜の生地」という埼玉県の史蹟指定の石碑と、越生町教育委員会の史蹟高札が建っている(写真1)。

この地は越生梅林で有名な梅林に近く、郊外閑静なところであり、筆者は三喜の出生地を確認のため、昭和五十四年一月と二月、再度この地を訪れた。

十年ほど前は、吉沢家は茅葺きの旧家の趣きがあったが、昭和四十四年に改築されて、昔の面影はなくなっている（写真3は改築前の茅葺きの吉沢家で、油絵として画き残されたものである）。

現当主幸一氏は、田代信綱より数えて二十二代目、三喜より数えて十四世に当たる。田代家は途中より医を廃して農業に従事し、十七代のとき、備後の人吉沢凡斎が田代家に入り医業を復活

写真1　田代三喜の生地　石碑・高札（越生町）

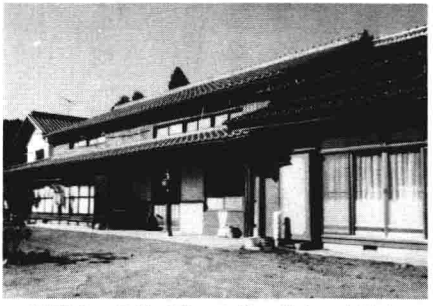


写真2　田代三喜の生地　現在の吉沢家

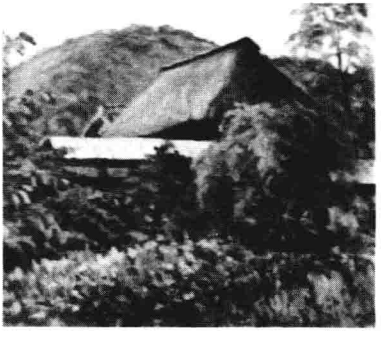


写真3　旧吉沢家（油絵）

写真4　田代家・吉沢家累代の墓（越生町）

写真5　吉沢凡斎の墓（越生町）

写真6　服部政正書簡及び『三喜備考』

させたが、十九代安平（安兵衛）より再び農に帰り、以後吉沢を称しているとのことである。

さて、栃木県佐野の漢方医で、浅田宗伯と親交のあった服部政世（通称甫庵、号は煉霞）が、明治二十二年九月に『三喜備考』を出版して、あらゆる文献を考証して三喜の正伝を残した。

この度、吉沢家を訪問して資料を訊ねたところ、服部政世が明治二十二年四月三十日付で、当時の当主、吉沢安兵衛に宛てた書簡があり、宛名に武州越生町大字古池、旧名古池村字田代。と書かれてある。また大正七

年九月二十日付、政世の孫服部昌松が、吉沢安兵衛の子源次郎宛に認めた書簡が残っている（写真6）。

これらのことから、田代三喜の出生地は越生で、現在の吉沢幸一氏宅であったことが推定されるのである。

このたび、『近世漢方医学書集成』刊行に際して、筆者所蔵、田代三喜の主著とされている『三喜十巻書』（『三帰廻翁医書』）を復刻することになったが、この書は本集成中最古のものである。よって、日本における後世派医学の開祖といわれている田代三喜の略伝と、『三喜十巻書』の解説、田代三喜の登場する歴史的背景について、旧稿（「本邦李朱学派の開祖田代三喜」『漢方の臨床』九巻十一号）に補筆訂正を加えてみることにした。

二　日本医学の変遷

「我が邦名医多しと雖も、像祀せらるるは、古来ただ鑑真（がんじん）と田代三喜とあるのみ」[1][2]といわれているが、日本医学史上、田代三喜の果した役割というのは、どのようなものであったろうか。その使命の意義を知るため、初めに有史以来日本医学の歩んだ道程の概要を顧みる必要がある。

日本医学は、その政治形態による時代の背景の下に、それぞれの変遷を繰りひろげてきた。史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家は便宜上これを次の如く分類している。(2)(3)(4)

(一) 太古の医学は、全く本能的医療行為の時代で、日常の経験からきわめて原始的な経験医療を行なっていたにすぎなかった。それは即ち民間療法の初歩的なもので、史実として伝えられているものは大己貴命、少彦名命の医療のごときものである。

またこの時代より、所謂魔法医術が自然発生的に行なわれ、「物の気」や「荒ぶる神」などの考えから祈禱、禁厭が頻りに医療の手段とされ、これが医療行為の裏面史として後々の時代にまで影響を与えるのである。

(二) 奈良朝以前(五四〇―七〇九)の医学。わが国の経験方のほかに、韓国医方や遣唐留学生により唐医方が輸入され、唐制を範とした大宝令による医事制度が初めて設けられた。

(三) 奈良朝(七一〇―七九三)の医学は、神仙家や仏教の影響により、宗教医学の時代に入り、僧医の制が布かれ、僧は医を兼ねていた。中国より僧医鑑真が来朝して医薬の道を開き、施薬院が設けられて、医療保障の先例を拓いた。

(四) 平安朝(七九四―一一八五)の医学。わが国の経験方は『大同類聚方』として集大成され、唐医書を引用した『金蘭方』や『医心方』などの大著述が、日本人の手によって編纂された。この時期に医療の専門分科がほぼ確立した。

(五) 鎌倉時代(一一八六―一三三三)の医学。この時代も僧侶と医学は密接な関係があり、宗教

医学の域を出なかった。中国より宋医学が輸入され、漢魏唐宋の医方を折衷採択し、自家の経験を加えた『頓医抄』『万安方』が梶原性全によって撰述された。しかしこの時代は漢学衰微し、伝統のみに執着している和気、丹波などの宮中医家は、なんらの発展性がなく沈滞の時期であった。

（六）室町時代（一三九三―一五七三）の医学。この時代の中期までは、宋代に著された簡便な治療指針である「和剤局方」が、専ら日本全国を支配し、単純な宋医学の模倣にあけくれていた。このような時期に田代三喜が明の留学より帰ってきた。当時中国はなお金・元の医学を踏襲していたので、三喜は李朱（李東垣・朱丹溪）の医学を学び伝え、ここに従来の局方の医学は一掃されたのである。これによって日本に初めて医学の流派が興り、やがて実証的医学抬頭の導火線となるのであった。

（七）安土桃山時代（一五七四―一六〇〇）の医学。三喜によって輸入された李朱の医学は、その門に学んだ曲直瀬道三が京都に還って広く天下にこれを唱導し、いわゆる道三流の医学は日本全国を風靡するに至った。道三は久しい間続いた宗教医学、即ち仏教医学を改め、宗教と医学とを分離させた。やがて儒教の道徳観による儒医の出現となり、古学の復興とともに古医方が抬頭し、李朱医学は後世派と呼ばれ、日本の医学に幾多の流派が発生するのである。

（八）江戸時代（一六〇三―一八六七）の医学。李朱学派に対して劉張派（劉河間と張子和の医流）が生まれ、これを後世派別派と称した。名古屋玄医、後藤艮山、山脇東洋、香川修庵、吉益東洞

ら古方諸大家の出現によって、傷寒論医学は隆盛を極め、燎原の火のごとく全国に拡大した。やがて多紀家一派の折衷派や、考証派が現われ、更に和方家の再現と、和蘭外科の輸入等により、実証的医学の風潮が漲ってきた。殊に革新的意気に燃えた古方派の中より、洋医学の研究が進められ、この期の日本文化は治安の恢復、社会秩序の整備とともに、学問技術の進展は空前の活況を呈し、日本医学はまさに百花斉放の観があった。

（九）明治時代以降（一八六八―）の医学。明治政府は欧米の文明諸国に伍するため、ドイツ医学を採用し、千有余年に亘って累積されてきた漢方医学を法的に抑圧排除した。爾来日本の医学は近代医学として列国と肩を並べ、世界的水準に到達し、幾多の業績をあげるに至った。一方伝統の漢方医学は衰亡の一途を辿り、僅かに特志家によって縷の如き命脈を保ってきたのであった。

昭和の初期、復古思想の波に乗って漢方医学復興が叫ばれたことがあった。太平洋戦争後アメリカ医学が輸入され、従来の唯物論的医学から精神身体医学への動きをみせてきた最新医学は、漢方医学の持っている数多くの特質を再検討し、新しい医学の建設に役立たせようとしている。

以上日本医学の変遷を概観したが、田代三喜以前、中国に留学した医家としては、隋には恵日、福因（六〇八）、唐には栄叡（七三三）、菅原清（八〇三）、菅原梶成（八三八）、明には竹田昌慶（一三六九）、坂浄運（一四九二―）等があり、坂浄運は仲景の傷寒論の方術を初めて伝えたという。『東洋医学史』[5]は全篇を二分して、前期と後期とし、前期は太古より田代三喜の帰朝まで、後期は三喜の帰

朝より明治末年までとしている。即ち田代三喜の果たした使命は、わが国が宋医学の模倣に終始して沈滞を続け、なんらの進展をみせ得なかったとき、金元李朱の医学を導入して新風を吹き込み、流派発生の導火線を作ったことであり、また宗教医学を改革して実証的医学発展の端緒となったところにあるとみられるのである。

三　三喜略伝と年譜

田代三喜の伝記は種々の憶説が加味されていて確かなものとはなっていないようである。しかし一般の通説を総合してみると大体次のようである。(1)～(9)

田代三喜（一四六五―一五三七）の名は導道、諱は三喜、字は祖範といい、範翁、廻翁、支山人、意足軒、江春庵、日玄、玄淵、善道などいう多くの号があった。

寿永、文治（一一八二―一一八九）の頃、伊豆に田代信綱という武士がいて、屋島の戦に源義経の軍に従って功をたてた。信綱は医も兼ねていたともいわれる。その子孫は相襲いで医となり、関東の武士の病を療していた。八代目の兼綱という人が、武蔵国（今の埼玉県）の川越（越生の方が正しいかもしれない）に移って住んでいた。三喜は兼綱の子として、後土御門天皇の寛正六年（一四六五）四月八日に川越で生まれた。一説に前述の如く越生ともいわれている。越生は川越の北方五

里（約二〇キロメートル）の地である。十五才のとき医に志し、当時は僧侶でなければ医となれないので妙心寺派に入って僧となった。

長享元年（一四八七）商船に便乗して明に渡り、留学すること十有二年、李東垣、朱丹溪の医学を学び、またその頃既に日本より明に留学して医を行なっていた僧医月湖について親しく修業したといわれている。

明応七年（一四九八）三喜が三十四才のとき、月湖の著書『全九集』や『済陰方』その他の医書を携えて日本に帰り、初め鎌倉の江春庵に居を定めた。号の江春庵はこの居の名によるものであるという。後に下野（今の栃木県）の足利に移ったが、当時足利は、日本第一の学府で足利学校があった。この頃足利成氏は関東を管領して下総の古河（今は茨城県）に在って古河公方（こがくぼう）といわれていた。

三喜が連歌師兼載を治療して古河に赴いたとき、足利成氏は三喜の高名をきいてこれを招請した。そこで三喜は永正六年（一五〇九）古河に移ったのである。それ以来三喜の名声は益々揚がり、世間の人は「古河の三喜」と呼ぶようになった。

古河に移って間もなく、三喜は僧籍を脱して髪を蓄え妻帯した。古河に居ること数年にして武蔵国に帰り、総・毛・武（今の千葉県、栃木県、茨城県、群馬県、埼玉県、東京都の一部等）殆んど関東一円の間を往来して医療に従事し、済生の功績は極めて多かった。

天文六年（一五三七）二月十九日病を得て歿した。年七十三。或いは一説に八十ともいう。

×　×　×

三喜の遺像は、古河に近い長谷村の一向寺（禅宗の寺で今は古河市となっている）にあった。わが国の医家で像を造って祀られているのは、奈良唐招提寺にある鑑真と、この三喜の二つだけであるというが、明治年間三喜の遺像は火災によって消失して終った。

前にも述べたように三喜は室町時代の末の頃、局方の学のみが行なわれていた時代に生まれ、初めて李朱医学を唱え、その学と術とを行ない、関東一帯を風靡したのであった。実にわが国における李朱学派の開祖である。しかし当時の日本文化の中心は京都であったので、片田舎の古河に居たため、その学説は広く天下に及ばなかった。

曲直瀬道三（一渓）は京都より関東足利学校に遊学し、三喜の門に入って弟子となり、前後七年間師事した。三喜はよく李朱医学の蘊奥を傾け伝え、道三が京都に帰ってこれを唱導するに及んで、天下の医風は全く一変するに至ったのである。

×　×　×

曲直瀬一渓が関東の足利学校に学んだのは二十二才のときで、三喜と会ったのは二十五才であった。三喜はそのとき既に六十七才になっていた。三喜が一渓と初めて会ったのは柳津という所であるという。柳津は古河にはなく、川越の近くの村落であろうというがいまだに判然としない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com